

トゥアレグの文化と社会 サハラ交易の昔と今

鳥取大学地域学部准教授 茨木 透

日本では、フォルクスワーゲン社的高级SUV車の愛称としての方がよく知られている「トゥアレグ」は、アフリカ・サハラ沙漠中央部からその南のサヘル地帯、国名で示すとアルジェリア、リビア、マリ、ニジェール、ブルキナ・ファソの5ヶ国に広がるベルベル系の遊牧民である。その人口は、推定でおよそ200万人から350万人程度と考えられ、その大部分がマリ(同国総人口の約7パーセント)とニジェール(同国総人口の約10パーセント)に居住している。彼らが使用する言語は「タマシェク語」で、「ティフィナル」と呼ばれる文字を使用し続けてきたのが大きな特徴である。

サハラからサヘルにかけての広大な地域に分布するトゥアレグは、しかし政治集団としては地域ごとの部族連合(計7ないし8)が最大であり、かつて一度もトゥアレグ全体が統一されたことはない。文化的には、男性がインディゴのベールを着用することで知られており、その色から西洋人からは「青い人びと」とも呼ばれる。宗教はイスラームであるが、男性とは対照的に女性がベールを着用しないことでも知られている。

その社会は身分階層制で、貴族である戦士と宗教者、平民(貢納民)、職人、解放ドレイに分かれる。かつては「イクラン」(タマシェク語)、「ベラ」(ジェルマ語:マリ、ニジェール)、「ブーズー」(ハウサ語:ニジェール)などと呼ばれるドレイが多数存在していた。地域集団ごとに「アメノカル」と呼ばれる首長が、通常最も有力な貴族=戦士の部族から選ばれる。アメノカルはまた国会議員・地方議員などにも選出されることが多い。

生業はアフリカ諸国の独立までは、遊牧と隊商それに略奪であった。独立後には後に述べる早魃などの影響で定住化が進行し、現在ではオアシスやサヘル地域での農耕のほか、運送業や観光業に従事する者も多く、かつての盛んであった隊商はニジェールやマリの砂漠を渡る塩交易がわずかに存続しているにすぎない。

交易の縮小によるトゥアレグの窮乏化の過程は以下のようなものである。かつて、サハラ中央部およびサハラ-サヘル間の交易をトゥアレグは一手に担っていた。その交易では、サヘルから地中海方面では金、革、駝鳥の羽、奴隷などが運ばれ、帰路の地中海からサヘル方面には布や金属製品などが運ばれた。またサハラとサヘル間では塩や家畜などが、逆にサヘルからサハラへは穀物や布などが運ばれた。植民地化以前にはこのような交易をトゥアレグが独占していたのである。

この地域の植民地化は第一次大戦後になってやっと完了する。1906年にはサヘルを東進したフランス軍がニジェールのアガデスを占領した。アガデスはケル・アイルのスルタン

の町で、現在もニジェール北部の主要都市である。現在の人口は約 10 万人で、アイル山系でのサハラ観光の拠点でもある。アガデスの占領後も、1915 年のマリでのフィルウンの峰起、続いて翌年にはカオゼンがアガデスを包囲する。カオゼン戦争とも呼ばれるアガデスをめぐる攻防は 1919 年になってようやくフランスの勝利という結果で終結する。

一方、地中海からも南下しようとしたフランス軍であるが、1881 年にはフラッテル率いるフランス軍サハラ遠征隊がトゥアレグによって全滅するという敗北を負い、ようやく 1899 年のイン・サラーの戦い、さらに 1902 年のティットの戦いでフランス側の勝利を経て、1904 年のフランス・トゥアレグ間の降伏協定に至る。この抵抗をしたケル・アハッガルの拠点がアルジェリアのタマンラセットであった。

この町にはその後フランス軍が駐屯部隊を置き、独立後はアラブ人が流入してきた。現在の人口は約 8 万人で、ホッガール山塊観光の拠点として多数の観光業者がヨーロッパからの観光客を受け入れている。同時に、タマンラセットはアルジェリア南部開発の拠点でもあり、アルジェリア軍の基地のある軍事都市でもあり、さらに、北アフリカ諸国やヨーロッパをめざすサハラ以南のアフリカ人の中継地でもある。

フランスがこの地域を平定した後も、アルジェリアとマリやニジェールの間は植民地時代、一定の往来の自由が認められていて、植民地化以前の交易も一定程度継続していった。同時に、サハラの交通路開発も進み、1922 年にはシトロエン社のサハラ・ミッションが行われたほか、1930 年代には一般人を対象とするサハラ・ツアー（アルジェ　タマンラセット　アガデス　ラゴス）も募集されるなどした。

第 2 次大戦後になると、サハラに石油やウランの資源が発見され、フランスはサハラ共和国構想（1956 年～）を打ち出す。このサハラ共和国の領域は、トゥアレグの居住地域と相当部分が重なり、トゥアレグに分離独立の期待を抱かせることになった。しかしながらアルジェリア独立戦争末期の 1961 年にはド＝ゴール大統領はこの構想を否定し、結局エビアン協定にもサヘル共和国のことは一切盛り込まれず、分離独立の夢は挫折した。

アフリカ諸国の独立（1960 年マリとニジェールの独立、1962 年アルジェリア独立）以降、各国政府による国境の管理が厳格化し、キャラバン交易の衰退がはじまる。そのような中、1963 年ケル・アドラル（マリ北東部のトゥアレグ）がマリ政府に対し峰起したのが、今日のトゥアレグ問題の発端とも言える。

この頃、ニジェールではアルリットにおいてウラン鉱山の開発が進み、1971 年には産出が開始された。その運搬路としての道路がアルリットからアガデスを経てタワ、さらにドッソまで整備されるなどニジェール北部の開発が進行する。（ウラン鉱石はさらにガヤを経てベナンのコトヌ港からフランスへ向けて船積みされる。）一方、1973-74 年および 1984-85 年の 2 度にわたる大干魃により、遊牧民は家畜を失うなど窮乏化した。多くのトゥアレグが難民となったり、都市での定住を余儀なくされたほか、若者を中心に国境を越えてリビアやアルジェリアへの出稼ぎもはじまった。その一部がリビアのカダフィの傭兵としてカ

ダフィ政権崩壊まで活動していたことも知られている。

かつての交易路は、現在では大型トラックによる物資の運搬ルートであるほか、サハラ以南アフリカから地中海方面への密輸ルートでもあり、またヨーロッパをめざすアフリカ人の北上ルートでもある。

【主要参考文献】

野町 和嘉 「"サハラ貴族"の末裔たち 沙漠の遊牧民トゥアレグ族」、『季刊民族学』、2(4)、no. 6 : 89-95、1978/10。

Claudot-Hawad, Hélène, Touaregs: Approvoiser le Désert, Paris: Gallimard, 2002.

Raffray, Mériadec, Touaregs: La Révolte des Hommes Blues, Paris: Ed. Economica, 2013.